

## パンドラの箱

2022. 11. 24

先日、隠れたカリキュラム（ヒドゥンカリキュラム）を取り上げた。中学校では、その一つとして部活動が大きな意味をもっている。部活動の地域移行は休日だけにとどまらず、近い将来、平日にも及ぶことはほぼ確実である。そうすると、高校も含めて学校教育における部活動の役割と意義を再検討しなければならない。

部活動の地域移行の話題に関しては、教員の働き方改革や多忙化解消が必ずついてくる。だが、元々は子どものスポーツ活動の持続可能性に重点があったはずである。少子化により、学校における部活動は、合同部活動や拠点校方式でも維持できず、子どものスポーツ環境を保障できない時代が目前に迫っている。

高校に勤務していたとき、野球部の部員が少なく、他校との連合チームで大会に出場していた。自分の学校は生徒数が少ないためやむを得ないと考えていた。ところが、通常規模の高校でも9人以上の部員をそろえることができないことを知り、多少ショックだった。聖光学院高校をはじめ一部の高校の野球部を見ていると、野球は相変わらず盛んなのだと思ってしまう。だが、実際はチーム編成に苦慮している公立高校が増えてきている。

中学校に勤務するようになった。自分の学校の野球部は、9人以上の部員がおり、元気に活動している。だが、市内を見渡すと、合同チームがある。9月下旬に行われた福島支部中学校新人大会の組み合わせを見てみる。3校合同チームが一つ、2校合同チームが3つ、計4つが合同チームである。ショックを通り越してさびしい。これでは、野球少年の行き場がなくなってしまう。

学校から部活動がなくなることに對しては、様々な意見が出ている。今まで、隠れたカリキュラムとして部活動が果たしてきた役割は大きいと認める。しかし、教員の献身的犠牲で成り立つ部活動の存続は、もう物理的に不可能なのであろう。

学習指導に加えて生徒指導まで何でも教員が行う日本型学校教育は、“パンドラの箱”である。部活動の地域移行は、このパンドラの箱を開けることを意味する。地域移行に反対する学校関係者には、これまで自分たちが築いてきた日本型学校教育が崩壊するかもしれないという危機感が、無意識に働いているのかもしれない。

これからは、学校は今まで以上に教育活動にしっかりと向き合い、充実させることで、これまで部活動が担ってきた教育的効果以上の成果を出さなければならない。学校が部活動に頼ってきた面を新たなステージにバージョンアップする必要がある。これこそが部活動改革の目的である。

パンドラの箱とは、触れてはいけないものという意味の例えとして使われている。パンドラの箱を開けるとは、災いを引き起こす原因をつくるという意味で使われる。ギリシャ神話では、パンドラは箱を開けてしまうが、すぐにふたをする。箱に残ったのは「希望」である。ぜひ、部活動改革が希望となるよう、進めていかなければならない。